

黒衣聖母

芥川龍之介

青空文庫

——この涙の谷に呻き泣きて、御身に願いをかけ奉る。……御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給え。……深く御柔軟、深く御哀憐、すぐれて甘くまします
「びるぜん、さんたまりや」様——

——和訳「けれんど」——

「どうです、これは。」

田代君はこう云いながら、一体の麻利耶観音を卓子の上へ載せて見せた。

麻利耶観音と称するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢聖母麻利耶の

代りに礼拝した、多くは白磁の観音像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その

麻利耶観音の中でも、博物館の陳列室や世間普通の蒐収家のキャビネットにあるよう

なものではない。第一これは顔を除いて、他はことごとく黒檀を刻んだ、一尺ばかりの

立像である。のみならず頸のまわりへ懸けた十字架形の瓔珞も、金と青貝とを象嵌

した、極めて精巧な細工らしい。その上顔は美しい牙彫で、しかも唇には珊瑚のような一

点の朱まで加えてある。……

私は黙つて腕を組んだまま、しばらくはこの黒衣聖母こくいせいぼの美しい顔を眺めていた。が、眺めている内に、何か怪しい表情が、象牙ぞうげの顔のどこだかに、漂ただよっているような心もちがした。いや、怪しいと云つたのでは物足りない。私にはその顔全体が、ある悪意を帯びた嘲笑あざわらを漲みなぎらしているような気さえたのである。

「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜誇ほこりの微笑を浮べながら、卓子テーブルの上の麻利耶観音と私の顔とを見比べて、もう一度こう繰返した。

「これは珍品ですね。が、何だかこの顔は、無気味ぶきみな所があるようじゃありませんか。」

「円満具足の相好そうこうとは行きませんか。そう云えばこの麻利耶観音には、妙な伝説が附随しているのです。」

「妙な伝説？」

私は眼を麻利耶観音から、思わず田代君の顔に移した。田代君は存外真面目まじめな表情を浮べながら、ちよいとその麻利耶観音を卓子テーブルの上から取り上げたが、すぐにまた元の位置に戻して、

「ええ、これは禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い聖母だと云う事ですよ。」

「まさか。」

「ところが実際そう云う事実が、持ち主にあつたと云うのです。」

田代君は椅子に腰を下すと、ほとんど物思わしげなども形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向うの椅子へかけると云う手真似をして見せた。

「ほんとうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい声を出した。田代君は私より一二年前に大を卒業した、秀才の聞えの高い法学士である。且また私の知っている限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いていない、教養に富んだ新思想家である、その田代君がこんな事を云い出す以上、まさかその妙な伝説と云うのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。——

「ほんとうですか。」

私が再こう念を押すと、田代君は燐寸の火をおもむろにパイプへ移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判断に任せるよりほかはありませんまい。が、ともかくもこ

の麻利耶観音には、気味の悪い因縁があるのだそうです。御退屈でなければ、御話します。——」

この麻利耶観音は、私の手にはいる以前、新潟県のある町の稲見と云う素封家にあつたのです。勿論骨董としてあつたのではなく、一家の繁栄を祈るべき宗門神としてあつたのです。

その稲見の当主と云うのは、ちょうど私と同期の法学士で、これが会社にも関係すれば、銀行にも手を出していると云う、まあ仲々の事業家なのです。そんな関係上、私も一二度稲見のために、ある便宜を計つてやつた事がありました。その札心だつたのでしよう。稲見はある年上京した序に、この家重代の麻利耶観音を私にくれて行つたのです。

私の所謂妙な伝説と云うのも、その時稲見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論そう云う不思議を信じている訳でも何でもありません。ただ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂われ因縁をざつと説明しただけだつたのです。

何でも稲見の母親が十か十一の秋だつたそうです。年代にすると、黒船が浦賀の港を擾がせた嘉永の末年にでも当りますか——その母親の弟になる、茂作と云う八ツばかりの男

の子が、重い癩疹はしかに罹かかりました。稲見の母親はお栄えいと云つて、二三年前ぜんの疫病に父母共世を去つて以来、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した祖母の手に育てられて来たのだそうです。ですから茂作が重病になると、稲見には曾祖母そうそぼに当る、その切髪きりがみの隠居の心配と云うものは、一ひと通りや二ふた通りではありません。が、いくら医者が手を尽しても、茂作の病氣は重くなるばかりで、ほとんど一週間と経たない内に、もう今日きょうか明日あすかと云う容体ようたいになつてしまいました。

するとある夜の事、お栄のよく寝入っている部屋へ、突然祖母がはいって来て、眠むがのを無理に抱だき起してから、人手も借りず甲斐甲斐しく、ちゃんと着物を着換えさせたそうです。お栄はまだ夢でも見ているような、ぼんやりした心もちでいましたが、祖母はすぐにその手を引いて、うす暗い雪洞ほんほりに人氣ひとけのない廊下ろうかを照らしながら、昼でも滅多にはいった事のない土蔵どそうへお栄をつれて行きました。

土蔵の奥には昔から、火伏せの稲荷いなりが祀まつつてあると云う、白木しろぎの御宮がありました。祖母は帯の間から鍵かぎを出して、その御宮の扉を開けましたが、今雪洞ほんほりの光に透すかして見ると、古びた錦の御戸帳みとちようの後に、端然と立っている御神体は、ほかでもない、この麻利耶観音なのです。お栄はそれを見ると同時に、急にこおろぎの鳴く声さえしない真夜中の土蔵が怖

くなつて、思わず祖母の膝へ縋りついたまま、しくしく泣き出してしまいました。が、祖母はいつもと違つて、お栄の泣くのものにも頓着せず、その麻利耶観音の御宮の前に坐りながら、恭しく額に十字を切つて、何かお栄にわからない御祈禱をあげ始めたそうです。

それがおよそ十分あまりも続いてから、祖母は静に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻りになだめなため、自分の隣に坐らせました。そうして今度はお栄にもわかるように、この黒檀の麻利耶観音へ、こんな願をかけ始めました。

「童貞聖麻利耶様、私が天にも地にも、杖柱と頼んで居りますのは、当年八歳の孫の茂作と、ここにつれて参りました姉のお栄ばかりでございませう。お栄もまだ御覽の通り、婿をとるほどの年でもございませぬ。もし唯今茂作の身に万一の事でもございませうたら、稲見の家は明日が日にも世嗣ぎが絶えてしまうのでございませう。そのような不祥がございませぬように、どうか茂作の一命を御守りなすつて下さいませう。それも私風情の信心には及ばない事でございませうたら、せめては私の息のございませう限り、茂作の命を御助け下さいませう。私もとる年でございませうし、靈魂を天主に御捧げ申すのも、長い事ではございませうまい。しかし、それまでには孫のお栄も、不慮の災難でもございませうなら、大方年頃になるでございませう。何卒私が目をつぶりますまででよろしくございませう。」

すから、死の天使アンジェロの御劍おんつるぎが茂作の体に触れませんかよう、御慈悲を御垂れ下さいまし。

「

祖母は切髪きりがみの頭かしらを下げて、熱心にこう祈りました。するとその言葉が終った時、恐る顔を擡もたげたお栄の眼には、気のせいか麻利耶観音が微笑したように見えたと言うのです。お栄は勿論小さな声をあげて、また祖母の膝に縋かえりつきました。が、祖母は反かえつて満足そうに、孫娘の背をさすりながら、

「さあ、もうあちらへ行きましょう。麻利耶様は難ありがた有がたい事に、この御婆さんのお祈りを御聞き入れになつて下さつたからね。」

と、何度も繰り返して云つたそうです。

さて明るる日になつて見ると、成程なるほど祖母の願ねがひがかなつたか、茂作は昨日きのうよりも熱あつが下つて、今まではまるで夢中だつたのが、次第しようきに正ただ気きさえついて来ました。この容ようす子すを見たら祖母の喜びは、仲々口には尽いませません。何でも稲見の母親は、その時祖母が笑いながら、涙をこぼしていた顔いまだが、未いまだに忘れられないとか云つています。その内に祖母は病氣の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れをしばらく休める心算つもりだったのでしよう。病間びやうまの隣とこへ床とこをとらせて、珍めづらしくそこへ横よこになりました。

その時お栄は御弾おはじきをしながら、祖母の枕もとに坐っていました。隠居は精根せいこんも尽きるほど、疲れ果てていたと見えて、まるで死んだ人のように、すぐに寝入ってしまったとか云う事です。ところがかれこれ一時間ばかりすると、茂作の介抱をしていた年輩の女中が、そつと次の間の襖ふすまを開けて、「御嬢様ちよいと御隠居様を御起し下さいまし。」と、慌あわてたような声で云いました。そこでお栄は子供の事ですから、早速祖母の側へ行つて、「御婆さん、御婆さん。」と二三度搔卷かいまきの袖を引いたそうです。が、どうしたのかふだんは眼慧めいとい祖母が、今日に限つていくら呼んでも返事をする気色けしきさえ見えません。その内に女中が不審ふしんそうに、病間からこちらへはいつて来ましたが、これは祖母の顔を見ると、気でも違つたかと思うほど、いきなり隠居の搔卷かいまきに縋すがりついて、「御隠居様、御隠居様。」と、必死の涙声を挙げ始めました。けれども祖母は眼のまわりにかすかな紫の色を止めたまま、やはり身動きもせず眠っています。と間まもなくもう一人の女中が、慌あわしく襖を開けたと思うとこれも、色を失つた顔を見せて、「御隠居様、——坊ちゃんが——御隠居様。」と、震ふるえ声で呼び立てました。勿論この女中の「坊ちゃんが——」は、お栄の耳にも明かに、茂作の容態ようたいの変つた事を知らせる力があつたのです。が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の声も聞えないように、じつと眼をつぶっているのです。

た。
……

茂作もそれから十分ばかりの内に、とうとう息を引き取りました。麻利耶観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

田代君はこう話し終ると、また陰鬱な眼を挙げて、じつと私の顔を眺めた。

「どうです。あなたにはこの伝説が、ほんとうにあつたとは思われませんか。」

私はためらつた。

「さあ——しかし——どうでしょう。」

田代君はしばらく黙つていた。が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、

「私はほんとうにあつたかとも思うのです。ただ、それが稲見家の聖母のせいだつたかどうかは、疑問ですが、——そう云えば、まだあなたはこの麻利耶観音の台座の銘めいをお読みにならなかつたでしょう。御覧なさい。此処に刻んである横文字を。——DESINE FATA

DEUM LECTI SPERARE PRECANDO……」

私はこの運命それ自身のような麻利耶観音へ、思わず無気味な眼を移した。聖母は黒檀こくたんの衣を纏まとつたまま、やはりその美しい象牙ぞうげの顔に、ある悪意を帯びた嘲笑を、永久に

冷然と湛^{たた}えている。
—

(大正九年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集³」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒衣聖母

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>